

社会貢献活動に対する学びの支援と

活動がもたらす成長の教育学的視点からの実証

研究代表者 千葉大学教育学部 教授 上杉 賢士

Kenshi UESUGI

研究の要旨

千葉県旭市には、市民有志で立ち上げた「旭・学び助成金 (Asahi Support System for Students = 通称: 旭3S)」のしくみがある。平成19年の発足以来、毎年、数グループが助成を受け、社会貢献活動を中心とした活動に取り組んでいる。研究代表者はこのしくみの発案者であり、発足以来運営委員及び審査委員長として携わってきた。そこで目撃する子どもたちの成長は目を見張るものがあり、この機会にその教育的な意味づけをしようとしたのが本研究の目的であった。そこで、研究代表者らが長期にわたって研究と実践の交流を続けているアメリカ・ミネソタ州にある学校支援組織としての「エドビジョン (EdVisions)」と連携し、彼らが開発した Project-Based Learning の効果測定に用いている「ホープ尺度 (Hope Score)」を参考にして、社会貢献活動における効果を測定して分析した。その結果、「自律性」「帰属意識」「関与」「学習目標指向性」などのいずれの尺度においても有意な変容が読み取れた。

1. 問題の所在と目的

(1) 問題の所在

千葉県旭市には、「旭・学び助成金」(以下、「旭3S」とする)のしくみがある。平成16年に当地で開催された日本生活科・総合学習教育学会全国大会を契機にして、市民有志によって設立された。「旭3S」から助成金を受けた活動は、地域社会をフィールドとし、多くの人々との交流を通して学び、地域社会への貢献を意図する点に特徴がある。

研究代表者(上杉)は、地元の旭ライオンズクラブ、旭ロータリークラブ、旭青年会議所、旭市PTA連合会などから選出されたメンバーで構成される運営委員会に委員の一人として参加するとともに、提出された企画書に対して助成金の交付を決定する審査委員長を務めている。その立場から、「旭3S」の活動における学びを、「プロジェクト型の学び」「評価規準をめあてにして学ぶ」「自らの興味や関心に基づいて学ぶ」「多様なコミュニケーションを通して学ぶ」「地

域をフィールドにして学ぶ」の5点に整理した(『旭・学び助成金(旭3S)の設置と運用』、千葉大学教育実践研究第15号、pp.65-74,2008)。

4年目の報告会が終わった直後の平成23年3月11日に、東日本大震災が発生し、旭市も甚大な被害を被った。「旭3S」の活動は、今後、被災地である旭市の復興支援も視野に入れた活動へと進化していくものと予想される。この機をとらえ、より広範な活動に発展させるために、「旭3S」による子どもたちの成長を現下の教育課題との関連で実証する必要がある。

(2) 研究の目的

「旭3S」は、発足以来5年目に突入し、これまでに延べ500名の子どもが助成金を受けて活動した。しかし、この活動に参加することによる変化や成長について学術的な調査は行われていない。本研究では、この活動がもたらす成長の意義を明確にするとともに、現下の教育課題であるキャリア教育や市民性教育に対する実践レベルからの有効な知見を提供することを目的とする。

2. 「旭3S」に期待される教育的効果

(1) 「市民性教育」の方法

「市民性教育」という用語が注目され始めて久しい。そのひとつの試みであるアメリカでの教育方法が、『プロジェクト・シチズン～子どもたちの挑戦～』に次のように紹介されている。

----- アメリカの子どもたちのための公民あるいは市民教育は、社会科 (social studies) やアメリカ政治 (the United States government)、公民科／市民的資質 (Civics／Citizenship) で一般的に学習されているが、近年地域でのボランティア活動の意義や手法を学ぶために開発されたコミュニティ・サービス・プログラムや紛争処理・調停過程を体験的に学ぶために開発された参加型プログラムを通じて行われる傾向がみられるようになった。(中略) こうした参加型あるいはプロジェクト型の市民教育カリキュラムの開発がアメリカで積極的に行われるようになった背景には、アメリカ民主主義に固有な政治・行政・法のシステムとプロセスをもっと体験的な学習へと転換することにより、市民的資質の育成をより現実的に保障しようとする意図があったと考えられる。-----

この「市民性教育」は、たとえば品川区の教育特区を活用した市民科設置の試みなどを筆頭にして、わが国でも徐々に注目され始めている。

しかし、黎明期においてはやむを得ないとしても、市民性教育という新たな教育課題を前にして、その取り扱いをめぐる混乱は少なくない。

学びをめぐる条件を学習内容と学習方法に二分すれば、わが国に伝統的な教育においては学習内容が優先され、学習方法は副次的なものとして扱われてこなかった。しかし、市民性教育という新たな教育課題は、教育内容よりもむしろ教育方法に焦点を当てる。アメリカで生じた議論が伝えるように、「市民」としての望ましい資質は固定化されたものではなく、参加型学習や体験的学習を通して創造的に生みだしていくものと考えられるからである。

そのための方法的原理について、佐藤学は「プログラムの実践」と「プロジェクトの実践」を対比させながら、次のように指摘している。

----- 「プログラムの実践」においては、たとえばプログラムを教師が作成しようとも、教育内容である科学・学問・芸術は教室の外から教材や課題にアレンジされて持ち込まれることになる。それに対して、「プロジェクトの実践」においては、教育内容である科学・学問・芸術は、教室の中で教師と子どものコミュニケーションをとおして生成され創造されるものであり、教育内容は所与のものではなく、教室で創造され構成され発展されるものとしてとらえられている。-----

佐藤の説明は便宜上、教室における学びを想定しているが、ここに示された「プロジェクトの実践」の特徴はむしろ地域をフィールドにした学びに適している。そのため、たとえば「教育内容は所与のものではなく、むしろ地域をフィールドにして住民と学習者のコミュニケーションをとおして創造され構成され発展されるもの」と読み替えることができる。

こうした特徴をもつプロジェクト・ベース学習は、市民性教育という新たな教育課題において最も優れた教育方法のひとつと言えよう。「旭3S」は、その方法論を基盤としている。

(2) 「キャリア教育」の現状と課題

近年、新たな教育課題としてのキャリア教育がにわかに注目を浴びている。その直接的なきっかけを提示したのは、同名の書によって「ニート」の存在を指摘した玄田有史らの告発であった。もともとイギリスで生まれたこの用語は、「就業・就学・職業訓練のいずれもしていない16～18歳の若者」を指し、労働政策上の分類を意味していた。しかし、若者のひきこもりが社会問題化しているわが国では「勤労意欲を喪失した若者」といったネガティブな意味で用いられるのが一般的となった。

わが国では、バブル経済が崩壊した後、企業は雇用抑制策をとり、いわゆる「就職氷河期」

が長く続いた。その結果として、若者の就労環境は大きく制限され、不就労を余儀なくされる層が大幅に増加した。また、新自由主義の浸透により格差社会と称される様相が生まれ、若者の意欲喪失化に一層の拍車がかかった。

そうした社会情勢や産業構造の変化とひきこもる若者の増加という現象が結びついて、「職業を求めない(非求職型)」や「職業に就きたくない(非希望型)」若者が増加しているというわが国に固有の見方が広がったと思われる。

この問題への国としての対応は早かった。文部科学省や経済産業省、厚生労働省などが、独自にあるいは共同で相次いで就労促進策を打ち出した。この動向に対して、筆者は期待と危惧の念の両方を抱いている。生涯学習の必要性が唱えられて久しいにもかかわらず、伝統的な学校教育は依然として卒業後の展望を描けていない。教育の目的をマクロに社会化(socialization)に置けば、学校と社会とが一体的に教育機能を発揮することはむろん望むべきことである。

しかし、その一方で、この動向を一過性のものにしてはならないと思う。経済が回復し、若者の就労が促進されれば「キャリア教育は終わり」では困る。「キャリア」を「生涯」と訳せば、それに見合うだけの長期的展望が必要になる。つまり、教育には「持続可能性」が必須の条件であり、ここ数年の間に起きた国を挙げてのムーブメントもまた、そうした要請に応えるものであってほしいと思う。

この点を克服するためには、キャリア形成を目的とする学びについての詳細な検討が必要である。結論から先に言えば、それは「参加型学習」や「体験型学習」を方法的原理とする点に特徴があり、現実・具体から学ぶことを基本とする。それはまた、前項で述べた市民性教育とも共通することである。

キャリア教育のもつそうした重要な視点をわが国の教育に導入する絶好の機会が訪れたのに、若者を対象とした単なる就労促進策に矮小化し

てはならない。

(3)「旭3S」における学びの意義

「旭・学び助成金」のシステムに支えられた学びの特徴は、次のように説明できる。

○プロジェクト型の学び

「旭3S」に応募しようとするグループ・個人は、まず所定の企画書の作成から始める。これには、プロジェクトのテーマ、テーマの価値、設定したゴール、追究の計画などが詳細に記される。追究のプロセスでは、当初の計画に従って進めながら、間断なく修正を余儀なくされる。プロジェクトが終結すると関係者の前でプレゼンテーションを行い、全体が終わるとふり返りをして一連の活動が終了する。

この一連のプロセスにおいて、正解のない「真正な課題」と向かい合い、入手した情報を適切に組み合わせる自分たちなりの結論を導く。こうして、「教育内容は所与のものではなく、創造され構成され発展されるもの」というプロジェクトの実践に必要な条件を満たす典型的な学びが実現される。

○評価規準をめあてにして学ぶ

「旭3S」では、「社会貢献」「自己形成」「具体性」「実現可能性」の4つの評価基準があらかじめ提示されている。この評価規準によってプロジェクトは方向づけられ、自らの学びをふり返る視点が与えられる。その結果として、プロジェクトは合目的的になるとともに、目的に沿って学習者自身が自らの学びをコントロールすることが可能になる。

また、応募されたプロジェクトの採否に関する審査も、この評価規準に即して行われる。そのことによって、プロジェクトの特徴や改善点が明らかになる。

○自らの興味と関心に基づいて学ぶ

プロジェクト型実践の最大の特徴は、学習者が自らの興味や関心に基づいて学ぶ点にある。自らの興味や関心が尊重されることによって、学習者は学びへの強い動機や意欲を獲得する。

本実践の基本モデルにしているエドビジョン

型プロジェクト・ベース学習では、その点に最大限の配慮をする一方で、学びを方向づける評価基準の事前提示を行う。これは、学習者の確かな成長を促すための措置であり、伝統的なプロジェクト学習がもっていた欠点を補うことに目的がある。

○多様なコミュニケーションを通して学ぶ

学校は効率を上げる目的において、同年代・同質の集団を中心とした関係が長期間維持される。そこは、限られた語彙によっても意思の疎通ができてしまう場であり、必然的にコミュニケーションする内容や範囲も限定的になる。異質な人々によって構成される社会に進み出る不安は、こうした学校における人間関係の貧弱さに起因しているのではないか。

「旭3S」における過去の実践においては、地域をフィールドにした多様なプロジェクトが展開された。これらに共通するのは、学校という枠組みの中では決してできない多様なコミュニケーションの体験である。相手の気持ちに配慮して、自らの気持ちを的確に伝えるというコミュニケーションの基本は、プロジェクトのプロセスで多様な人々との交流を通して必然的に獲得される。

○現実・具体から学ぶ

「旭3S」に支えられた活動では、まず自分たちの興味や関心に基づくテーマを企画書にまとめて外部の審査を受けねばならない。ここ数年は、審査委員会は公開で行われ、審査委員や運営委員が参加する場で大人の質問に答えなければならない。助成が決定した後は、社会貢献を主要な目的とする追究が行われる。そして、追究の成果は、市民に開かれた場で報告することが求められる。このように、一連の活動はすべて学校の外側に広がる地域と密接な関係を保ちながら展開される。

キャリア教育の実質的展開のためには、新たな教育装置は必ずしも必要ではない。日常の学びを開き、現実的・具体的課題を付加することによって、学校と社会における学びの連続性に

配慮すればよい。

3. 平成24年度における活動の実際

(1)「旭・学び助成金」の概要

[目的]

旭市内の小・中・高校生が、社会貢献を意図した活動を積極的に展開するために、その資金的裏付けとなる助成金を提供し、それを通じて官・民・学が一体となって、子どもの学びを支援するラーニング・コミュニティを形成します。

[趣旨]

何か仕事をしようとする場合に、資金的裏付けは必要不可欠です。しかし、教育予算にはおのずと限りがあり、そのために子どもの学びが制約されるという現実があります。この状況を打開するとともにより意味のある成長を促すためには、「民」すなわち民間企業や市民の理解と協力によって子どもの学びを支援する資金的な基盤を形成することが考えられます。この企画は、恩恵を受ける子どもたちにとってはキャリア教育としての意味をもち、提供する側にとっては教育への理解と参加の契機を提供し、行政にとっては市ぐるみの教育展開を可能にするラーニング・コミュニティの形成という、わが国ではあまり例のないプロジェクトとなります。

[応募方法]

○応募資格

- ・旭市内の小・中・高校に在籍する児童・生徒ならだれでも応募できます。
- ・個人・グループ・学級・学校を対象とし、原則として学校単位の応募はできません。

○応募方法

- ・所定の応募用紙に必要事項を記入し、プロジェクト企画書を添えて事務局に提出してください。応募用紙・企画書は事務局にありますので、ご連絡ください。
- ・応募に際しては、「指導担当者（教員）」を1名特定するとともに、交付された助成金の管理責任者を兼ねることになります。

[平成24年度運営委員・審査委員一覧]

- ・運営委員
- 委員長 森 正志 (ライオンズクラブ)
- 副委員長 篠崎一海 (ロータリークラブ)
- 〃 鈴木教義 (青年会議所)
- 委員 上杉賢士 (千葉大学教授)
- 〃 林 秋生 (ライオンズクラブ)
- 〃 増田博史 (ロータリークラブ)
- 〃 飯田耕司 (ロータリークラブ)
- 〃 小関秀央 (青年会議所)
- 〃 松本 勝 (PTA 連絡協議会)
- 〃 菅谷充雅 (教育委員会)

- ・審査委員
- 委員長 上杉賢士 (千葉大学教授)
- 副委員長 新行内幸雄 (ロータリークラブ)
- 〃 八木雅之 (神田外語大学教授)
- 委員 赤座 修 (ライオンズクラブ)
- 〃 天野一哉 (星槎大学准教授)
- 〃 小林若菜 (千葉大学学生)

(2) 助成団体とテーマ

- 旭市立第二中学校吹奏楽部・旭市立中央小学校音楽部「Love & Dream II コンサート～Smile for 旭～」
- 旭市立第二中学校ボランティア部「地域のためになることを～Love & Dream II コンサート支援プロジェクト～」
- 旭第一中学校美術部「人と人とのつながり～人物画に思いを込めて～」
- 旭中央小学校「縦割りグループ栽培活動～花でみんなを笑顔にしたい、地域のためになることを～」
- 旭市立干潟小学校「地域美化大作戦」
- 旭市立海上中学校「クリーン&グリーン作戦 II in 海上」
- [活動履歴]
- Love & Dream コンサート

平成24年8月25日に、千葉県東総文化会館において、市民600名の参加を得て開催した。
- 平成24年度活動報告会

平成25年3月2日に、千葉県東総文化会

館において開催した。
[審査結果通知文の一例]

旭市立第一中学校美術部 様
旭3S運営委員長 森 正志
審査委員長 上杉 賢士

[審査結果]
この度、皆さんから応募していただきました「人と人とのつながり～人物画に思いを込めて～」のプロジェクトは、厳正な審査の結果、「旭3S」の目的を十分満たしていると判断しました。そこで、第1段階として、申請がありました金額のうち、交通費を除く73,270円を助成することに決定しましたのでお知らせします。交通費については、タクシー以外の移動手段を工夫してください。それにかかる費用については、後ほど清算して実費を助成することにします。

[審査委員会からの意見]

- この度の震災で旭市は大きな被害を受けましたが、中学生の皆さんが被災者のために自分たちにできることを真剣に考え応募してくれたことに、審査員一同感激しています。ぜひ皆さんも、このプロジェクトを通して、災害からの復興支援を担う一員として活躍されることを願っています。
- 被災者の方々には、その立場になってみなければわからないいろいろな苦しみや悩みがあると面ます。このプロジェクトを成功させる鍵は、皆さんがどれだけ心を込めて制作するかにかかっています。でも、それは皆さんが実力を上げるいい機会だと思います。がんばってください。
- 価値のある活動に中学生の皆さんが取り組むとはいえ、タクシーを利用することに若干の懸念があります。コミュニティバスや市のバスなどの利用が考えられませんか。それらを工夫して、移動にかかる費用(タクシー利用も含む)を後で助成することにします。
※実際にはコミュニティバスを利用したた

め、バス代の実費を助成した。

4. 学びがもたらす成長の分析

(1) 用いた尺度

教育の成果をどのように可視化するかという点について、これまで様々な検討が行われてきた。とりわけ、本研究のように体験活動やプロジェクトによる学びの成果の測定はかなり困難だという見方が支配的であった。

その点について、プロジェクト・ベース学習を開発し同様な問題意識をもつエドビジョン (EdVisions) のメンバーは、「Hope Study (以下、「ホープ尺度」) という尺度を引用した分析を試みた。

「ホープ尺度」とは、生徒が将来成功する可能性を在学中の学習状況から推測しようとしたものである。その内容は、「有能感」「自律性」「所属感」など思春期の感情的ニーズに配慮した教育環境が、子どもたちの適応感や学力を高め、将来の成功にもつながるという理論的仮説に基づいている。

以下に、効果測定に使用した視点と具体的な調査項目を示す。

[自律性]

自己統制と選択の機会のことを指す。なぜ自律が学校で必要かということ、自律欲求に支援的であると認識された教室においては動機がより高まるからで、それは個人の見方や考え方が認められた教室で、欲求を満たす選択の機会が教室で与えられるからである。

- 1)自分でそうすべきだと考えているから
- 2)先生に勧められたから※
- 3)友だちに誘われたから※
- 4)その学習や活動が楽しそうだったから
- 5)自分の将来に役立ちそうだったから
- 6)自分を好きになれそうだったから
- 7)自分にとって大切なことだから
- 8)自分を誇りに思えそうだから
- 9)だれかに褒めてもらえそうだから※

[帰属意識]

個人の生活における対人関係の深さや質を測る尺度である。帰属意識がなぜ学校に必要かということ、学校環境における肯定的な仲間関係が互いに支え合う親密な友情をはぐくみ、学校において相手を尊重する風土が形成されるからである。

- 1)クラスの友だちは、私の学習や活動を快く助けてくれた
- 2)クラスの友だちは、私のことを仲間だと思ってくれている
- 3)先生は私のことを気にかけてくれている
- 4)先生は、私が仲間であることを大切に思ってくれていた
- 5)先生は、私がどれくらい学習や活動に努力しているかに関心をもっていた
- 6)先生は、私の学習や活動を快く助けてくれた
- 7)クラスの友だちは、私の気持ちをよく考えてくれた
- 8)クラスの友だちは、他の友だちを好きなのと同じように、私のことも好きだった
- 9)クラスの友だちは、私のことを気にかけてくれた
- 10)先生は、私が学習や活動にベストを尽くすことを望んでいた
- 11)先生は、他の友だちを好きなのと同じように私のことも好きだった

[関与]

行動的関与とは、たとえば熱心に取り組む、集中する、注意をはらうといったことである。関与がなぜ学校で必要かといえば、生徒が学習に注ぐ努力及び持続の量によって変わるからである。関与の高い学習者は、資料について深く理解し、知識をより長く保存するという点で学習の質がすぐれている。

- 1)学校で新しいことに取り組むのが楽しい
- 2)学校では全力で学習や活動に取り組んでいる
- 3)学校でみんなと何かをしているときには、進

んで取り組んでいる

- 4)学校で先生やみんなといっしょに何かをしているときは楽しいと思う
- 5)学校では、楽しく過ごしている
- 6)学校では、先生や友だちとの話し合いに進んで参加している
- 7)先生のいうことをしっかり聞こうとしている

[学習目標指向性]

達成のための努の努力の背後にある理由を表す。「パフォーマンス指向性」が他の人より優れていることを示すことを目標としているのに対して、「学習目標指向性」は純粹に知識やスキルを獲得することを目標とする。

- 1)先生たちは、その活動の目標を達成できると信じていた
- 2)先生たちは、正しい答えを出すことよりも、取り組む意味の方が重要だと考えていた
- 3)先生たちは、失敗することで学ぶことがたくさんあると考えていた
- 4)先生たちは、テストの得点よりも、どれだけ勉強しているかが重要だと考えていた
- 5)先生たちは、暗記ではなく本当に理解することを私たちに望んでいた
- 6)先生たちは、努力し続けることが大切だと考えていた

[ホープ]

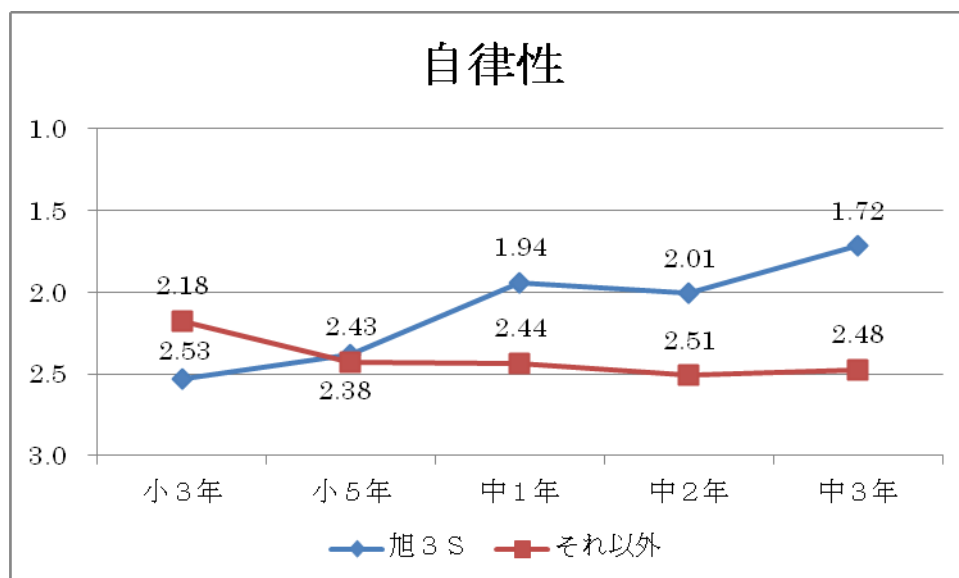
自分の能力や成功への可能性を信じ、その実現に向けて努力する指向性をさす。現在の学習状況への満足の程度が、将来の成功をどの程度予測できるかという、将来の自己の成功への予測性という視点である。

- 1)困った時は解決法をたくさん考えようとした
 - 2)取り組んでいる時は努力しようとした
 - 3)取り組んでいる時はいつも疲れていると感じていた※
 - 4)自分の将来に大切なことを得るために、いろいろな方法を考えようとした
 - 5)友だちがあきらめてしまう時でも、解決の方法を見つけようと努力した
 - 6)その学習や活動で体験したことは、自分の将来のために役立つと思った
 - 7)取り組んでいる時はいつも悩んでいた※
- 各項目については4段階評定で回答を求め、末尾に※を付した項目は集計時に反転させた。

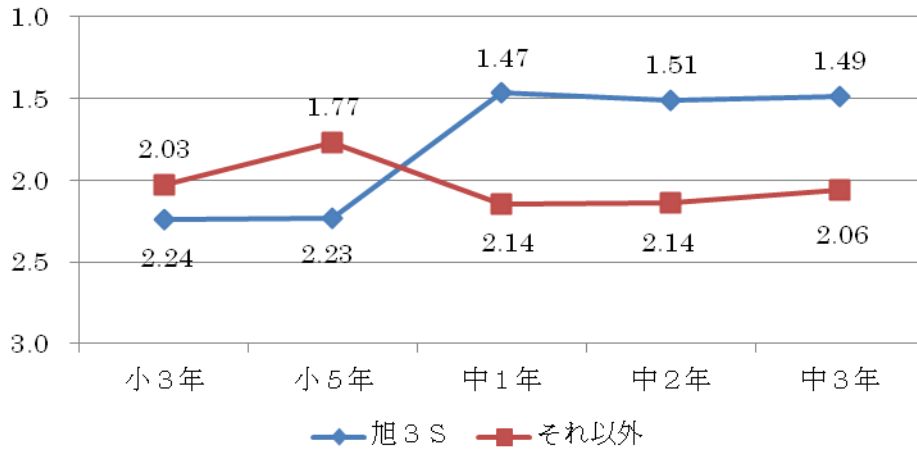
(2) 調査結果

「旭3S」の助成金を受けた計164名に対して、活動終了後に回答を求めた。また、比較の対象として、小・中学校各3校で各学年ごとに120名になるように回答を依頼した。

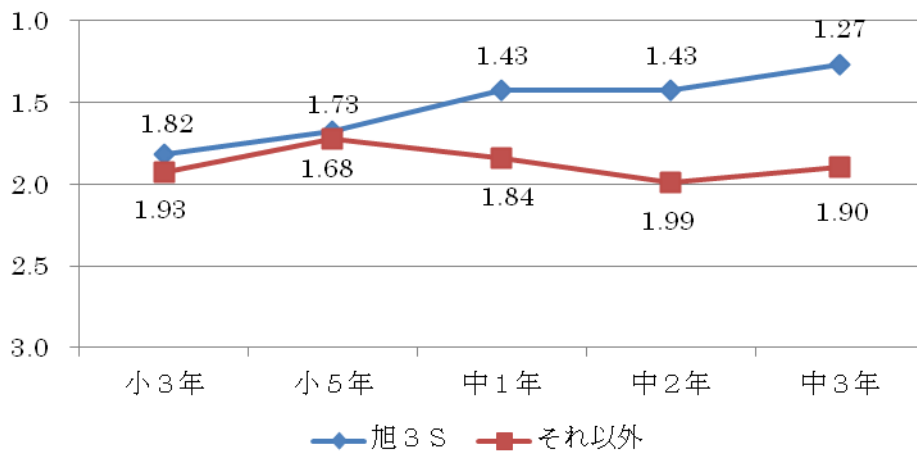
以下に、その結果を掲げる。



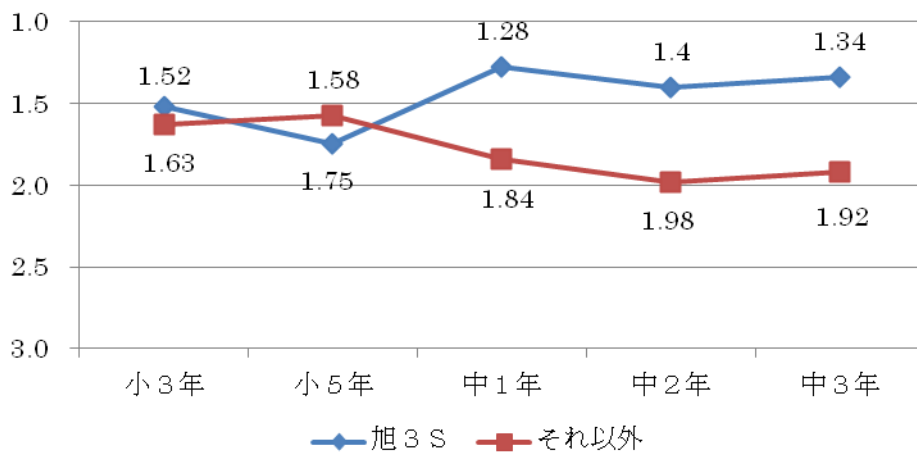
帰属意識

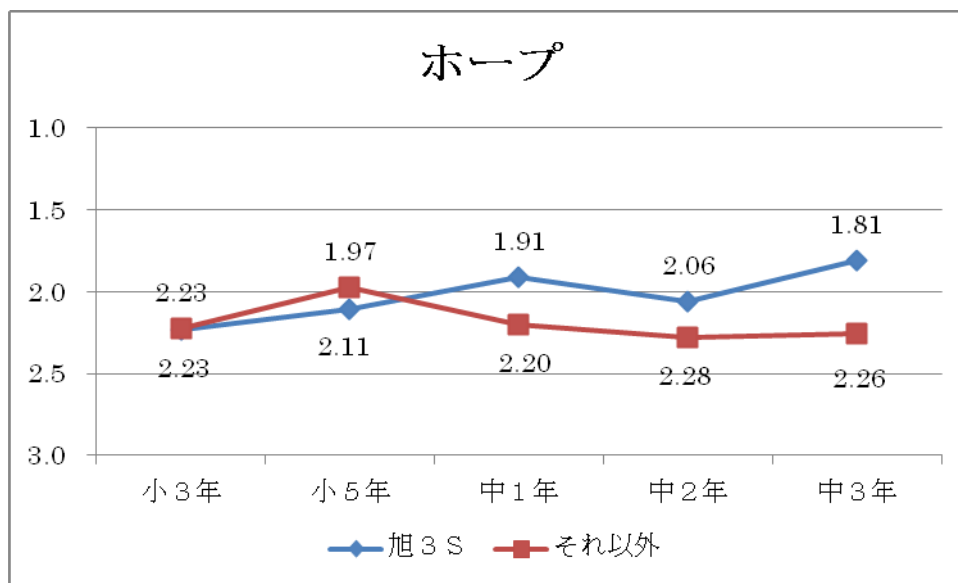


関与



学習目標指向性





(2) 分析と考察

各項目ともほぼ同様な傾向を示しているので、ここでは概括的な分析・考察を行う。

「旭3S」に応募する活動は、教育課程上では総合的な学習の時間や特別活動、部活動などにおける活動を基盤にしている。応募のきっかけは、すでに応募経験がある中学生たちは自発的意思による場合が多いが、初めての場合は教師からの提案や教師主導の活動である場合が多い。この現状が、そのまま調査結果に反映されていると読むことができる。

すなわち、小学生では、教師主導で活動が展開される場合が多く、子どもたちもそれに追随しているだけというケースが多いことが推測される。これに対して、中学生の活動の多くは自発的意思によるものである。とりわけ、旭第二中学校の吹奏楽部による「Love & Dream コンサート」は、同校のボランティア部や小学校まで巻き込んで、生徒主導の活動として市民を巻き込んだ広範な人々に認知される定例行事として定着している。

そうした社会貢献活動がもたらす成長は、効果測定のために用意した「自律性」「帰属意識」「関与」「目標指向性」「ホープ」のすべての領域において顕著である。

5. 若干のまとめ

本研究で分析の対象とした実践は、若者の社会貢献活動を市民有志が資金的な側面から援助しようとしている点に特徴がある。そして、「旭3S」運営委員会の基盤を成すライオンズクラブやロータリークラブ、青年会議所などは、団体設立趣旨そのものに社会貢献を掲げてきた。

しかし、主として資金的な援助を目的とした活動をどれほど重ねても、それが社会的あるいは教育的にどのような効果をもたらすかは不明であるという重大なジレンマを抱いていた。

その点について、本研究を通して教育学的な視点から活動の効果を明確にした意味は大きいといえる。とりわけ、現下の教育課題であるキャリア教育や市民性教育と関連付け、若者が自分の将来に向けて勇気と希望を獲得しつつあるという本研究によって導き出された事実は、活動の主体である若者のみならず支援する団体にも今後の展望を明確に提供するものであった。

「旭3S」は、設立以来7年目を迎え、旭市における青少年育成のための重要な基盤として定着した。今後、継続的に発信する情報は、他の自治体にも強い影響を及ぼすと考えられる。

なお、本研究の成果も含めた活動全体の様子は、<http://www.asahi3s.com> を通して継続的に

発信していく予定である。

[参考資料] 平成24年度活動報告書掲載の
審査委員長挨拶文(抄)

去る3月2日、東総文化会館で恒例の報告会が行われました。子どもたちの発表に耳を傾け、会場に詰めかけてくださった方々のお顔を拝見しながら、私は何とも幸せな気分でした。

思い起こせば8年前、当時の伊藤市長さんからのリクエストが、これもまた当時の教育委員会多田清司課長さん経由で私に伝えられました。合併して新・旭市になったことを契機にして、市の発展の方向を描く総合計画に若い人の意見を反映させたいといいます。早速、中学1年生向けのオリエンテーションを計画しました。その成果は、約5か月後に同じ東総文化会館で披露され、中学生たちの提言が総合計画のなかにふんだんに取り入れられました。

そのころ、日本生活科・総合学習学会から全国大会の千葉県開催を依頼されていました。そこで、この流れに便乗する形で、おずおずと多田課長さんに申し出てみました。これもまた二つ返事で了承され、約2年に及ぶ学会の準備を重ねた後に大会当日を迎えました。その結果、総参加者数800人あまり、終了後に開催された懇親会には500人を超える出席者があり、異例なほどの大規模な学会となりました。

「旭3S」が設立されたのは、この急テンポな流れに乗ってのことでした。学会開催に向けて学校の実践の充実が加速するなかで、関係者のなかではこれを一過性の現象で終わらせたくないという気持ちが広がっていました。子どもたちは、学会の準備に向かいながら、たくましく育っていました。それは、単に形を整えようとするのではなく、これを子どもたちの成長の契機にしたいという学校関係者の熱い思いの現れでした。

その後の準備は、ほぼすべて多田課長さんに整えていただき、私は連れられてロータリークラブやライオンズクラブの例会に出席しました。

そして、「子どもたちの成長のためにぜひ」と、資金的な基盤の設立を訴えて回りました。ほぼ同時に参加の意思表示をしてくださった青年会議所も含めて、皆さんは強い賛意を示してください、「旭3S」の骨格が完成しました。こうして官・民・学の協力により他に例のない子育てのシステムが、この旭市に完成したのです。

それから6年。毎回の報告会で見せる子どもたちの成長には目を見張るものがありました。プレゼンの技術向上は当然ですが、内容も充実の一途をたどっています。大人に先駆けて、報告者に質問する子どもたちの姿も目立つようになりました。会場にいる大人たちはといえば、子どもの成長した姿を目の当たりにして、ほとんどウルウル状態です。私もまた、いつものことですが、前に記したようなこれまでにいきさつを思い出しながら、目頭が熱くなるのを禁じえませんでした。(中略)

皆さんには感謝してもし尽せない思いでいっぱいです。今後とも、森運営委員長、八木雅之審査委員長を中心に、この旭3Sが旭市の子どもたちが育つプラットフォームとして、いっそう発展されることを、心から、心から、心から、祈念いたします。

旭3S審査委員長 上杉 賢士

[主な参考文献]

- *Center for Civic Education 著、全国法教育ネットワーク訳「プロジェクト・シチズン～子どもたちの挑戦～」現代人文社、2003
- *安彦忠彦編「新版カリキュラム研究入門」勁草書房、1999
- *玄田有史・曲沼美恵著「ニート～フリーターでもなく失業者でもなく～」幻冬舎、2004
- *ロン・ニューエル著、上杉賢士・市川洋子監訳「学びの情熱を呼び覚ますプロジェクト・ベース学習」学事出版、2004
- *上杉賢士・市川洋子「旭・学び助成金(旭3S)の設置と運用」千葉大学教育実践研究、

第 15 号、2008